

2009年度第2学期 共通教育科目「哲学基礎 B」

「認識するとはどういうことか？」

### 第三回講義

Was bisher geschah

- 1、ミュンヒハウゼンのトリレンマ
- 2、トリレンマ

課題

「予想される反論「ミュンヒハウゼンのトリレンマは、トリレンマという論理法則にもとづいた論証であるので、基礎付け批判にならない」を批判しなさい」

#### 注1：ミュンヒハウゼンのトリレンマの議論への批判

クラフトは、ミュンヒハウゼンのトリレンマを次のように批判している。

＜ミュンヒハウゼンのトリレンマの議論は、論理学を前提している。つまり、単純構成的トリレンマの推論が妥当であることを前提している。

$$\begin{array}{c} p \supset s \ \& \ q \supset s \ \& \ r \supset s \\ \hline p \vee q \vee r \\ \therefore s \end{array}$$

しかし、他方で、「単純構成的トリレンマが妥当な推論である」という命題については、その根拠を問うならば、それはミュンヒハウゼンのトリレンマに陥り、根拠付けを失う。ゆえに、ミュンヒハウゼンのトリレンマの議論は、自己論駁的である。＞

あるいは、別の言い方をすると次のようになる。

＜ミュンヒハウゼンのトリレンマの論証は、つぎのようなものである。＜推論 T (単純構成的トリレンマ) が妥当であり、前提 D (  $p \supset s \ \& \ q \supset s \ \& \ r \supset s$  と  $p \vee q \vee r$  ) が真であるならば、命題 S 「いかなる知も窮極的な根拠付けを持たない」は真である。＞ この結論は、「推論 T が妥当である」を前提している。この前提は、命題 s と矛盾する。＞

## あなたは、この批判についてどう考えますか？

この批判に対しては、次のように反論することが出来る。

反論 1 : ある前提から矛盾が帰結するならば、そこから論理的に帰結することは、前提の少なくとも一つが間違っているということであって、結論がまちがっているということではない。したがって、この批判は、無効である。もっとも、この反論もまた論理法則を前提している。

反論 2 : より一般的に言うと、論理法則を前提すると命題 s が帰結することになり、論理法則を前提しないと、そのときには、何でも帰結するので、命題 s が帰結する。したがって、いずれにしても、命題 s が帰結する。

もっとも、この反論もまた論理法則を前提している。

## § 3、ミュンヒハウゼンのトリレンマからの帰結

「基礎づけ主義」が批判される時、帰結するのは次の 3 つの立場であろう。

- (1) いかなる主張も行わない「懐疑主義」(skepticism)。
- (2) 何かを主張するが、それが誤謬である可能性を認める「可謬主義」(falibilism)。

例えば、ポパーやアルバートの「批判的合理主義」は、「基礎づけ主義」をとらず、「可謬主義」をとる。可謬主義は、確実に真であることが証明された命題を学問の出発点にするのではなく、とりあえず真らしい命題を出発点にし、その命題をテストにかけ、テストによって反証・反ぱくされない限りで、その命題を採用し続けようとする立場であり、すべての命題につねに誤謬の可能性を認める立場である。

- (3) それでも、「基礎づけ主義」の可能性をなおも追及すること

(2)の立場は、どのようにしてある主張を行うのか、どのようにしてある主張を正当化するのかによって、つぎのように区別されるだろう。

- (a) 決断主義(decisionism)
- (b) 規約主義(conventionalism)

約束主義 (あるとき、ある人々による、自覚的な約束)  
慣習主義 (いつ、誰によるのかわからない、慣習)

## (1) 懐疑主義

ミュンヒハウゼンのトリレンマの帰結が、命題 S「いかなる知も窮極的な根拠付けを持たない」であるとしよう。知とは、根拠のある真なる信念であるとすれば、根拠を失った知は、もはや知ではなくて、信念にすぎない。

知 K1 の根拠が知 K2 であり、知 K2 の根拠がないとしよう。そのとき、知 K2 は独断ないし信念に過ぎないことになるので確実に真であるとはいえない（もちろん、その人が根拠を知らなくても真である可能性はのこる。）しかし、その人にとっては、K2 が知ではないなら、K1 もまた根拠を失うことになる。なぜなら、信念は知の根拠とはなり得ないからである。

つまり、「究極的に根拠付けられた知は存在しない。それゆえに、そもそもいかなる知も存在しない」ことになる。これは懐疑主義と呼ばれる立場である。

そもそも、ミュンヒハウゼンは、古代懐疑主義の懐疑の方式の一つに大変よく似ている。古代の懐疑主義は、このような懐疑の方式から、懐疑主義を主張した。

(a) 懐疑からの帰結（古代の懐疑主義の場合）

判断中止”epoke-“epoch と不動心”ataraxia” “apatheia “apathy

(b) 帰結としての懐疑主義とそれへの批判

命題 S2 「いかなる知も存在しない」というのは、懐疑主義と呼ばれる立場である。懐疑主義は、命題 S2 を主張するが、それを知だということはできない。なぜなら、命題 S2 が知であるならば、それは命題 S2 の内容に矛盾するからである。懐疑主義は自己矛盾する。

もし命題 S2 が知ではないとすれば、命題 2 は何だろうか。信念だろうか？

しかし、根拠がないと気づいていながら、信念を保持し続けることは可能だろうか？ もし不可能だとすると、懐疑主義はやはり自己矛盾する。

## 2、批判的合理主義

では、H・アルバートはどのように考えたのだろうか。彼はポパーにならって、批判的合理主義を主張した。ポパーの批判的合理主義とは次のような立場である。

＜我々は、知を根拠付けることはできないが、しかし根拠がなくても、我々はある信念を知と見なすことができる。それは、その信念を経験のテストにかけて、テストによって反証されていない限りにおいて、その信念を真であるとみなすこと、つまり知とみなす。＞

この立場なら、論理法則もまた経験のテストにかけて、反証されない限りにおいて真であると思なすことができるだろう。では、上述の「批判的合理主義」の立場そのものの正しさを、批判的合理主義で正当化できるだろうか？それが可能であるためには、「批判的合理主義」そのものを経験のテストにかけることが出来

なければならない。しかし、非合理的立場を採用する者に対して、批判的合理主義を採用すべきであるということ、批判的合理主義それ自身によって可能だろうか。そのようには思えない。そこでポパーは、批判的合理主義そのもの選択は、非合理的決断に基づくのだと考えた。

ポパーの立場は、決断主義の一種である。

『開かれた社会とその敵』（小河原誠、内田詔夫訳、未来社、第二部、第24章）より

「包括的合理主義は、「私には、論証あるいは経験という手段によって弁護され得ないような考えや仮定を受け入れる用意はない」という人の態度として表現できよう。」<sup>212</sup> これを自己自身に適用すれば、放棄されるべきものであることになる。「それゆえに、論理的に支持できない。」<sup>212</sup> したがって、我々は合理的に弁護された仮定から出発することは出来ない。そこで、出発点となる仮定は、いわば何でもよく、テストに掛けることが重要になる。

「誰であれ、合理主義的態度を採用する者が、まさにそうするのは、論拠もないのに、ある種の提案あるいは決心または信念もしくは習慣ないしは行動——これらもまた翻って非合理的とよばれざるをえないのだが——を採用したからであるということである。いずれによせ、それは非合理的な理性信仰とするされよう。」<sup>213</sup> 「根本的な合理主義的態度は、非合理的な決定、あるいは理性への信仰によって基礎付けられる、という事実を承認する批判的合理主義の態度に存する」<sup>213</sup>

#### 注4：3種類の「なぜ」質問

「なぜ」質問は、次の三種類に分かれる。

- (1) 出来事の原因を問う「なぜ」
- (2) 行為の理由を問う「なぜ」
- (3) 主張の根拠を問う「なぜ」

ミュンヒハウゼンのトリレンマと関係するのは、(3)である。

(1)と(2)の「なぜ」も、もし「なぜ、なぜ」と問い続けると、同様のトリレンマになる。

しかし、それらが引き起こす問題は、(3)の知の基礎付け問題とは別種のものである。

(1)に関していうと、知の基礎付けに関しては深刻な問題をひきおこさない。なぜなら、もしある出来事の原因がわからないとしても、その出来事が起こったことが疑わしくなる事は

ないからである。しかし、ここからは、別の問題が生じる。つまり、我々が出来事の原因を問い続けるとき、

(a)もし無限に遡行するのだとすると、我々の探求には終わりが無い。

(b)もし循環すると、これは因果の系列だから、時間が循環していることになる。

(そんなことは、可能だろうか。)

(c)もしどこかで停止すると、原因のない出来事が存在することになる。

(自由な意志決定が存在するなら、それはそのような出来事の一つである。)

(2)に関していうと、この系列がある種のトリレンマになっても、知の基礎付けに関しては深刻な問題を引き起こさない。なぜなら、「なぜ・・・したいのか」という問いは、意図の存在を前提しており、この問いに答えられなくても、意図の存在が脅かされることはないからである。

(a)我々の行為の理由を無限に遡るとすることは、心理学的にありえない。

(b)もし行為の理由が循環しているとする、その循環を構成する意図の中のある一つの意図からは、二つの意図が生まれることになる。(それは、どのようにして可能になるのだろうか。)

(c)もしどこかで停止すると、より上位の意図を持たない意図が存在することになる。

行為の理由は、ある意図(ある目的)であろう。さらにその意図(その目的)の理由は、別のより上位の意図(目的)であろう。もし、より上位の意図(目的)が解からないとしても、そのことは、意図(目的)を無効(無意味)なものにはしないからである。

ある意図を持っているのだが、それが手段となるより上位の意図が見つからないとしよう。このとき、その人は、困らないだろうか？

例えば、りんごを食べたい、という理由がわからなくても、りんごを食べたいという欲望はなくなるだろうか。意図が存在すると

(この理由について関心のある方は、拙論「問答の意味論と基礎付け問題」(『大阪大学文学部紀要』第37巻 p.153-190)を参照してください。)